

「独立型社会福祉士」に関する仮説的研究

— 社会福祉士が独立を選択する過程にみる「援助観」形成プロセス —

小 川 幸 裕

I. はじめに

社会福祉士は、「専門的知識及び技術をもって、身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うことを業とする者をいう」（社会福祉士及び介護福祉士法第2条）と定義されている。しかし、社会福祉士は名称独占の国家資格として誕生してから20年が経過したにもかかわらず、「顔が見えない専門職」などの揶揄や、「社会保障審議会福祉部会の議論でも、社会福祉の業務がみえにくいという批判」がされるなど、いまだ専門職としての位置づけを確かなものにできないでいる（白澤 2007：22）。

社会福祉士がアイデンティティを確立することが困難な背景について、社会福祉士は理念と現実の間で、真摯に自らの業務に取り組めば取り組むほど疲労困憊していくという深刻な現状にあることが指摘されている（新崎 2006）。この疲労は、所属する組織や機関の利益と支援対象である当事者の利益の間で、社会福祉士としてあるべき姿を模索するというジレンマ¹が要因の一つとして考えられる。横山（2004：25）も「ソーシャルワーカーは自らのアイデンティティにかかわる倫理的ジレンマを複雑で混沌とした『現場』状況のなかで経験し、自らの援助スタンスや、援助とはだれのなにを助けることなのかといった本質的な問いについてたびたび悩まされる」とし「この繰り返しのなかで迷いや痛みを伴って蓄積、濾過されたものが『援助とはなにか』という本質的命題へのこたえとなる」と述べている。つまり、社会福祉士が現場の中で抱えるジレンマの延長線上には、社会福祉士のアイデンティティを形成する要因が

含まれているのではないだろうか。

このような状況の中、近年社会福祉士が組織・機関に所属せず自ら社会福祉士事務所を立ち上げ、独立した立場で地域特性に応じたソーシャルワーク実践の広がりが見られる（小川 2007）。この新たな形態でソーシャルワークを展開している社会福祉士は、「独立型社会福祉士」と呼ばれ「地域を基盤として独立した立場でソーシャルワークを実践する者である」と定義されている（谷川 2005：17）。特徴として①既存の福祉サービス提供機関や行政に所属しないことによって、様々な外的要因の影響を受けにくいということ、②そのため利用者支援の全てのプロセスにおいて最大限の自由裁量を獲得し行使できる立場に自らを位置づけられるということがあげられている。この「独立型社会福祉士」は、組織の利益や理念に左右されず純粋に当事者の立場にたって支援ができるという意味において社会福祉士本来の実践を目指す形態と考えられる。

そこで本研究では、現場でのジレンマを経て独立を選択することでどのように社会福祉士の援助観が形成されていくのかに着目し経験のプロセス・ガイドを提示すること試みたい。

II. 方法

1. 方法

1) M-GTA 法の採用理由

本研究の分析方法は、木下（2003）による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を採用した。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、グレーザー（Glaser, B.G.）とスト劳斯（Strauss, A.L.）によって開発され、データに密着して独自の理論を生成する方法であり、データと諸データの比較に

¹ 本稿では、ジレンマを「動因と障害因が互いに拮抗して、動きが取れぬ状態」と定義する。中尾弘之編（1988）『葛藤—心理学・生物学・精神医学』金剛出版

よって関係づけ、データのまとまりから算出したカテゴリーによって一連の現象を説明する質的研究法である（木下 2003）。

方法としての適合性について M-GTA は「社会的相互作用に関係し人間行動の説明と予測に優れた理論であることが期待」されており、第1に「人間と人間が直接的にやり取りする社会的相互作用に関わる研究」であること、第2に「ヒューマンサービス領域」であること、第3に「研究対象とする現象がプロセス的性格をもっていること」があげられている（木下 2003：89）。本研究は、第一に調査協力者²となる「独立型社会福祉士」の職域がヒューマンサービス領域であること、第二に、理解のしやすさ、分析ワークシートなどの具体的手順、結果の応用を含めて検証であるという立場が明示されていたことによること、第三に「独立型社会福祉士」が援助観を形成するプロセスを明らかにすることを試みるものであることから、M-GTA 法を採用することとした。

2) 調査協力者の概要

調査協力者は、日本において「独立型社会福祉士」として実践経験をおおむね3年以上持っていること、また独立をする以前に福祉機関・組織に対人援助職としておおむね8年以上雇用され対人援助職に従事していたこと、なおかつ研修会や講演の場で自らの実践を他者に伝えたりする機会を得ている人、4名を選定した。これは、「独立型社会福祉士」として一定程度の実践経験を有しなければ、独立を選択した過程に対する意味づけが困難であると判断したためである。また機関や組織に雇用される経験を一定期間もつことで、独立以前と独立後の比較から独立の過程を説明することが可能と考えたこと、さらにインタビューにおいて自らの実践を具体的に語るためには、研修会や講演を通して実践を言語化するトレーニングがなされていることが必要と判断したためである。調査協力者の属性は、40歳代が2名、50歳代が2名であった。

3) 調査データの収集

調査データの収集期間は、2007年8月から同年10月である。データの収集方法は、調査協力者との個別面接によって行った。インタビューにあたって研究の目的および話せる範囲で構わないこと、プライバシーの厳守について伝え、データの扱い（録音・逐語記録・分析手順と方法・結果の公開・論文化）については文書および口頭で説明し研究協力者の了解を得た。

インタビューは半構造化面接で行い、了解を得て録音し逐語記録を作成した。まず、現在の状況について自由に話してもらい、属性や経験などは話の流れの中で確認した。現在の状況までの話がひとくぎりしたところ、独立の背景や転機となった出来事について聞いた。不明確な点は確認したが、話の流れを重視し、その意味合いのまま受けとめていった。面接場所は、調査協力者の勤務先3ケース、喫茶店が1ケースで、面接時間は90分～170分であった。

2. 分析の具体的な手順と分析ワークシートについて

分析はデータを1行ずつ読みデータから概念生成し、概念間の関係をカテゴリーで説明する一連のプロセスをたどるが、結果の記述は逆のプロセスとして説明することになるため分析手順を示しておく。分析はまず、分析テーマとして設定した「社会福祉士としての『援助観』形成プロセス」および「社会福祉士が独立を選択する背景となる『価値観』との関連」に照らして経験を細部にわたって語った人のうち、最も注目した人の逐語記録を繰り返し読むことからはじめた。最初に、重要と思われた部分の語りの意味を検討し、その解釈に沿って他の部分や他の人のデータについて類似例を検討した。

そして、逐語録をもとに具体例を厳選してピックアップし、データの大きなまとまりごとに解釈及び定義を確定し、理論を構成する最小単位となる概念名を生成し分析ワークシートに記載した。その際、関連する内容や対極例などを理論的

² 調査研究では調査者がデータ収集の対象とする者のことを「調査対象者」とするのが一般的である。しかし、本研究ではデータ収集後も分析結果の現実への適合性等の確認などの協力を依頼していることから、斎藤論文を参考に「調査協力者」とした。

メモとして残した。次に対極例を意識しながら概念を20個程度つくった段階で分析ワークシートの理論的メモなどを参考にしながらカテゴリーを生成し結果図案を繰り返し書いた。そのたびに分析ワークシートに立ち戻り、必要があれば修正、加筆した。

Ⅲ. 結果と考察

本研究は質的研究のため、結果はいずれも筆者自身の解釈が含まれている。質的研究法の特徴でもある解釈や考察を含む結果は分けて記述することが困難なため、まとめて以下で報告する。紙面の関係上、プロセス全体を詳細に報告できないため、重要と思われた【 】の前後のプロセスを中心にみていくこととし、あとはカテゴリーの説明とする。

1. 分析結果の提示（結果図）とストーリーライン

M-GTA では結果は概念やカテゴリーを用いた結果図で示される。結果図は図1のとおりである。分析の結果、以下のような全体像が得られた。概念を「 」, サブカテゴリーを[], コ

アカテゴリーを【 】の記号を用いて表記している。また、以下の文中の『 』はインタビュー・データからの引用であり、引用内の括弧は筆者による補足である。

独立を選択した社会福祉士が援助観を形成するプロセスは、【あるべき社会福祉士像と現実との比較】を経て【一時離脱による価値の醸成】に至り、そこを基点として【価値実践スタイルとしての独立】が行なわれていた。プロセスにおいて特に注目されるのは、次の2点である。第1は【一時離脱による価値の醸成】である。これは現場におけるジレンマの蓄積を契機とし、一時的にジレンマから離れることで専門職としての価値と生活者としての価値を醸成していくプロセスである。第2は「自己への問いかけの保持」である。これは一時離脱によって醸成された専門家としての価値と生活者としての価値とは何かといった本質的な問いを保持し続けることを社会福祉士の援助観として形成していくプロセスである。これらのプロセスを経て、立場が異なる価値を問い続けながら実践できるスタイルの選択として【価値実践スタイルとしての独立】が見出された。以下、カテゴリーごとにみていく。

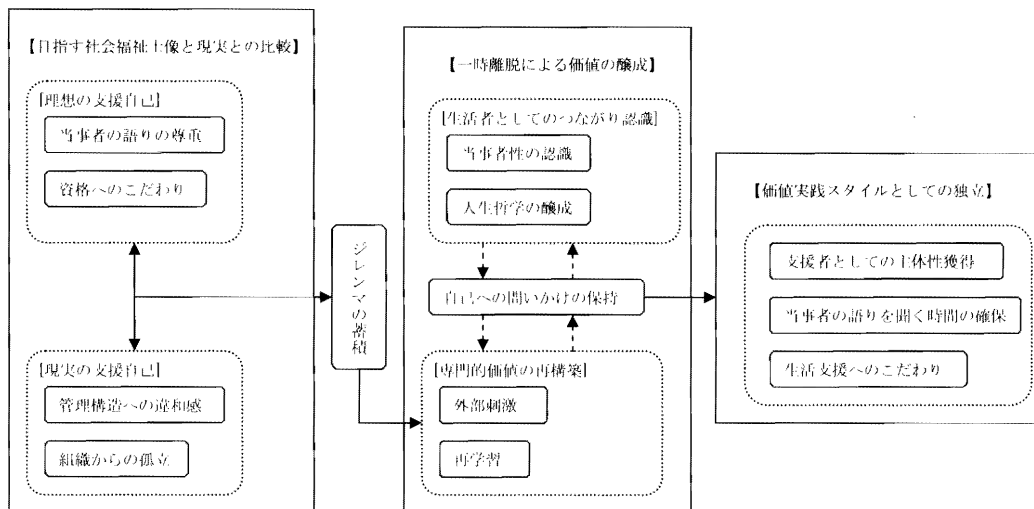


図1 独立を選択する社会福祉士の「援助観」形成プロセス

2. 【目指す社会福祉士像と現実との比較】

社会福祉士として独立を選択する以前は、【目指す社会福祉士像と現実との葛藤】というカテゴリーで説明することができる。これは、社会福祉士として目指したい自己と現実との比較によって葛藤を抱えることである。ここで中心概念となるのは、「理想の支援自己」と「現実の支援自己」である。

1) 【理想の支援自己】：「当事者の語りの尊重」「資格へのこだわり」

【理想の支援自己】とは社会福祉士として目指す支援を実践する自己の認識である。これは「当事者の語りの尊重」「資格へのこだわり」の2つの概念によって形成されていた。

第1は「当事者の語りの尊重」である。これは、『当事者が発する語りみたいなものは、あんまり評価されていない』『周りが判断するんじゃないくて当事者がなんかよかったな—と思える何か』と当事者の利益を最優先に考える上で語りに価値を見出すことである。これらの背景には『すごい利用者からいっぱい、いろんなものを教えてもらった』『利用者に惹かれました』『その職業の喜びみたいなもの』と当事者との語りを聴くことや関わり自体を実践の原動力としていることが伺える。

第2は「資格へのこだわり」である。これは自らが社会福祉士であるという意識を常に持ち支援者というよりも社会福祉士として当事者と接することにこだわりを持って実践を行うことである。ある社会福祉士は『社会福祉士はこうあるべきみたいな』『施設職員の視点とワーカー（社会福祉士）って言葉に代えたときの視点って違う気がする』と述べている。また、別の社会福祉士は『あくまで社会福祉士、施設の中で社会福祉士がどうやって生きていくかっていうことをがんばろう』と組織の一員としてよりも社会福祉士としての価値を追求する姿勢を保とうとしていると解釈できる。

2) 【現実の支援自己】：「管理構造への違和感」「組織からの孤立」

【現実の支援自己】とは、社会福祉士として組織

で実践をする中で自らが目指す実践とは違った実践を行っている現実の自己を認識することである。この「現実の支援自己」には2つの概念が見出された。

第1は福祉現場の閉鎖的な現実を構成している「管理構造への違和感」である。これは、福祉施設という閉鎖的・管理的な場でパターンリズム的な言動に出会うことや、そのような立場を要求されることに対して違和感や反発をもつことである。ある社会福祉士は『（利用者を）辱めるようなことを平気で言っているのが私は納得できなかった』と述べている。別の社会福祉士は『施設の中に入っちゃったらやっぱりその当時（障害者運動をやっていた学生時代）言われていたような現実が毎日毎日起こっているわけじゃない、とにかく管理』と述べ、利用者を利用者としてしか見ないような管理的な体制に対しての反発があったと認識できる。この“管理”についての問題意識が醸成された背景について『おまえらに管理されなきゃいけないってどういうことなのかって考えたことあるかって言われて』という過去の経験に強く影響を受けていると考えられる。

第2は、「組織からの孤立」である。これは、所属機関から期待される業務に取り組みず、自らが目指す支援を実践することによって自らの存在意義を確認しようとするが、結果的に同僚や上司などから孤立し現場に不応する自己を発見することである。ある社会福祉士は、『みんな受け入れてくれないんですよ私の意見を。あんたなんで一人で難しいこと言ってとか』と述べている。また『職場にとっていい労働者ではなかったんです』『自分自身の中で、その人が期待する仕事を素直にできない人間であるっていうことが私にとって苦痛だったんです』と組織から期待される役割に応えられないという苦しさや組織に適応できない人間であるという自覚がさらに職場での居場所を少なくしていたと解釈できる。また別の社会福祉士は『体制と戦わなければいけない』『施設を管理している人たちになんか言わなきゃいけない』と自らの考えや理念を組織への違和感として表現することで組織からの孤立が促進されていたと認識できる。

3. 【一時離脱による価値の醸成】

1) 「ジレンマ体験」

プロセス全体において注目されるのは「自己への問いかけの保持」である。これは「理想の支援自己」と「現実の支援自己」の比較の中で、『常に私にしかできないことってなんだろうって』と自分の実践がそれでよかったのか、何をしようとしているのかを自己に問い続けることであり、問いを問いのまま保持することである。この「自己への問いかけの保持」において重要な概念となるのが「ジレンマの蓄積」である。「ジレンマの蓄積」は社会福祉士としての無力さや限界を知らされるようなインパクトのある情緒的体験であると同時に自己の援助への問いかけでもある。【一時離脱による価値の醸成】とは、この「ジレンマの蓄積」を契機に一時的に現場を離れることで、社会福祉士の価値を意味づける参照軸やよりどころが模索され、社会福祉士の価値が経験的に醸成されていく過程である。この【一時離脱による価値の醸成】の動因として[専門的価値の再構築]と[生活者としてのつながり意識]の2つが見出された。

2) [専門的価値の再構築]: 「外部刺激」「再学習」

[専門的価値の再構築]とは、苦痛を伴う「ジレンマの蓄積」から意図的に離れることで、改めて自らの実践を問い直す作業を行い専門的価値の再構築を行うことである。一時離脱の方法としては「外部刺激」と「再学習」が確認された。「外部刺激」とは社会福祉士会への参加や職場以外で講演などを行うことによって、これまでの実践の振り返りや意味づけを行う機会を得ることである。ある社会福祉士は『今の自分が限界だから外から社会福祉士会とか知恵とか言葉とかもらって刺激をうけて』と現場における自らの限界を自覚する経験が外部刺激を取り入れるきっかけになっていると解釈できる。また別の社会福祉士は『社会福祉士会っていう組織に入ることによってなんらかの形で声は反映してもらえたらな』と述べており、他者に自らの実践内容を説明する機会を得ることも、自らの実践の言語化や意味づけにつながっていると考えられる。

「再学習」は、大学編入や大学院へ進学することで、これまでの実践と理論を融合を試みる過程

において価値の再構築を行うことである。ある社会福祉士は『自分で成熟しようと思って能動的に毎日苦悩して勉強しなさいといけない』『これじゃだめだと思ってたんです。もっと人を納得させて一緒に歩んでくれる人を増やさないといけない。そのためには感覚でものをいうんじゃない。もう一回勉強しなさいといけない』と自らの実践を言語化し他者に伝え理解を得られる能力の必要性を強く感じている。また、別の社会福祉士は新たに学びなおすことについて『（社会福祉は）生活に密着している。そういう意味でもしろくてたまらなかった』『（社会福祉は）人を見る視点なんだって気がついた』と、改めて社会福祉士の専門性が生活支援に基づいているとの認識を確認する契機となっていると解釈できる。

しかし、一方である社会福祉士が『ギャップがひどい。もうバランスが取れない』と表現するように「外部刺激」や「再学習」は専門的価値の再構築を行うきっかけであると同時に、自らが目指す支援が所属する施設や機関で実現できていないことを再確認するもきっかけともなっていると認識できる。

3) [生活者としてのつながり認識]: 「当事者性の認識」「人生哲学の形成」

[生活者としてのつながり意識]とは、これまでの経験を意味づけしていく過程において、援助するもの・される者という関係性から距離をおくことで自らも一人の生活者であることを意識化することである。これは社会福祉士という専門家として利用者に関わることを本質的態度とするのではなく、自らも一人の生活者である自覚を接点として利用者のつながりを認識することである。この[生活者としてのつながり認識]を構成する概念として「当事者性の確認」と「人生哲学の形成」の2つが見出された。

まず「当事者性の認識」であるが、これは社会福祉士が自らの人生や生活の中で、支援を受ける当事者になる経験を経て、自分もこれまで支援の対象として見ていた当事者と変わらない存在であることを認識することである。ある社会福祉士は『立場が違うとこんなに簡単に一つの物事の捉え方が違うのかって』述べている。また別の社会

福祉士も『自分が患者になるっていう経験だとか専門職でない一般の人間として生活することの中で専門職という立場でやっていることのおかしさっていうのかな、こんなに違うんだっていうのを気付かされて』と自らが当事者の立場になる経験を通して、これまでいかに無自覚に当事者に接していたかを認識している。

第2は「人生哲学の形成」である。ある社会福祉士は『(生活することについて) どういうふうに思っているかっていう哲学みたいなものがないと』、また別の社会福祉士は『生まれてきて死ぬときにね、あーこの人生、二重丸じゃないけど、ほどほど丸だったかっていえる人生を送れるのが私が目指したい生き方なんです』と述べている。これは自らの生活経験を積極的に意味づけすることによって、人が生きることや生活することの価値を常に意識化させていると解釈できる。そして『人生の時間と生活が、ぴったりくるぐらいの年にならないとね』『いろんな経験をしていくと時間的なものがかかる』と述べていることから人生哲学に関わる価値を醸成するためには、ある一定の年月や時間が必要であると認識している。

4. 【価値実践スタイルとしての独立】

このように「ジレンマの蓄積」を契機に所属する組織や機関から一時的に離れることで、社会福祉士としての援助観が形成される過程を見た。そこで形成された援助観とは、「専門家としての価値」と「生活者としての価値」という立場が異なる価値を問い続けながら実践を行うことであったと解釈できる。この【自己への問いかけの保持】を可能とする選択として【価値実践スタイルとしての独立】が行なわれていた。ある社会福祉士は独立して実践することを『(自らが目指す理念を)一番表現しやすい位置にいる』と表現し、専門職と生活者という立場が異なる価値を問い続ける上で、「独立型社会福祉士」は適したスタイルだと認識している。

この【価値実践スタイルとしての独立】は「支援者としての主体性の獲得」「語りを聞く時間の確保」「生活へのこだわり」の3つの概念によって支えられていた。「支援者としての主体性の獲得」とは、社会福祉士として実践を展開したくて

も裁量権がなく組織の判断が優先されやすい現実に対して、ある社会福祉士は『おかしいと思うことを誰にも遠慮せずについたり動いたりできる』と述べている。これは独立することで裁量権を発揮でき、自らの責任において支援を展開している実感が形成されることで支援者としての主体性の形成が図られていると解釈できる。さらに、裁量権の獲得は『独立して自分で仕事の時間を調整できる』『時間をかけてしっかりその人の思いを聞くことができる』と、独立は自分のペースで仕事することを可能とし当事者の「語りを聞く時間の確保」につながっている。また別の社会福祉士は『本人の口から語れるものなら語っていただく。それをじっくり聞く時間を取ることができるのが独立』と述べている。これら「支援者としての主体性の獲得」「語りを聞く時間の確保」は、社会福祉士として「生活へのこだわり」を強く持ちたいという思いによって意識化されていると考えられる。ある社会福祉士は『どういうものが生活かみたいなのをちゃんと考える下地みたいなものが必要』と述べていることから、生活を専門家として理解するためには自らの生活を常に意識化すると同時に、当事者の生活に向き合い続けることに価値を見出していると解釈できる。また別の社会福祉士は『一人ひとりがほんとにわからない存在でそういう人と僕ら関わっているんだよという意識を常に持つ』ことも必要であると表現している。

IV. 結び

以上、本研究では「独立型社会福祉士」に関する仮説を生成することを目的に、社会福祉士が独立する過程に着目し質的研究を行なった。その結果、独立を選択する社会福祉士は専門的価値と個人的価値という立場が異なる価値を問いのまま保持し続けるという援助観が見出された。そして、このような本質的な問いを社会福祉士として保持し続けることができる実践スタイルとして「独立型社会福祉士」という実践形態が選択されていたのではないかと考えられる。

横山(2004: 30)も「『専門家』であることを否定し単に一人の個人としてクライアントに向き合うことを重要視するのではなく、むしろ「専門

家」としての役割を引き受けつつ、自らの生き様に照らして『クライアント』とされる人との連帯点を見出しながら対話していけるかどうか問われている」と述べているように、専門的価値と個人的価値のどちら側に身を置くかではなく両者の間でゆらぎつつもバランスを保ち実践するという価値が社会福祉士には求められるのではなかろうか。

最後に本研究における限界及び今後の課題について整理をしたい。第1は信憑性の確保に関する手続きが不十分であったことである。質的研究はいずれの方法も結果の妥当性が問題となることが多い。そのため、M-GTA法を習熟している社会福祉研究者によるスーパービジョンや分析結果を文章化したものを面接対象となった調査協力者に報告し、それぞれの実践経験に照らして信頼性があるか、理解し難い点はないか意見聴取などを行うことで信憑性の確保に努める必要がある。第2は分析に用いたデータは、調査協力者が自らの過去の実践経験や独立の過程を振り返って語った内容と、現在進行中の実践を振り返ってその過程について語った内容が混在している点である。実践の振り返りという手法の限界として、時間的経過に伴う記憶の曖昧さが存在する。また、調査時からさかのぼって「独立した時期が近い」調査協力者が語る内容と「独立した時期が遠い」調査協力者が語る内容では、質的に差がみられた。今後は結果の多面的な検証が必要であり、独立を選択

しない社会福祉士はどのような価値形成プロセスとたどるかについても比較検討をする必要があると考える。

文献

- 保正友子・竹沢昌子・鈴木真理子・ほか著 (2003)『成長するソーシャルワーカー—11人のキャリアと人生』簡井書房
- 岩間伸之 (2006)「地域を基盤とした包括的支援への助走」社会福祉研究第98号, 94
- 木下康仁 (2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂
- 野口裕二 (2002)『物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院
- 横山登志子 (2004)「精神保健福祉領域の「現場」で生成するソーシャルワーカーの援助観—ソーシャルワーカーの自己規定に着目して—」社会福祉学第45巻第2号, 24-33
- 横山登志子 (2006)「地域生活支援をめぐる精神科ソーシャルワーカーの本質的使命—2つのジレンマを手がかりとして—」社会福祉学第46巻第3号, 109-121
- 横山登志子 (2006)「『現場』での『経験』を通したソーシャルワーカーの主体的構成プロセス—医療機関に勤務する精神科ソーシャルワーカーに着目して—」社会福祉学第47巻第3号, 29-41
- 小川幸裕 (2007)「『独立型社会福祉』の動向に関する一考察」帯広大谷短期大学紀要44, 33-42
- 齋藤征人 (2007)「精神保健福祉実践者の『実践知』形成過程に関する仮説的研究」社会福祉士14号, 109-116
- 桜井 厚・小林多寿子 (2005)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房
- 白澤政一 (2007)「社会福祉士制度見直しの現状と今後の課題」月刊福祉7, 22
- 谷川ひとみ (2005)「第1節 独立型社会福祉士とは何か」独立型社会福祉士研究委員会『独立型社会福祉士養成研修テキスト』社団法人日本社会福祉士会, 17